

優秀賞

想いの託し方

北海道 藤女子中学校 三学年

前田 海音

今年の夏の朝、祖母が急死した。突然すぎて実感もわかないまま、母は支払いや手続きに追われた。そんな最中母は「私が死んだらまず保険会社に連絡ね。証券これね。」と私に指示した。祖母は保険に加入していなかった。経済的な負担は、時に悲しみと向き合うことさえ妨げてしまうように思えた。私はもう会えない祖母の笑顔を思い浮かべながら、万が一の時大切な人にお金を遺せることは、この世を去る人にも、残される人にも、感謝と安心をもたらすのではないかと思った。

同じ夏、兄が成人を迎えた。父母は兄に医療保険加入を提案した。様々な意思決定が十八歳からは独自に行える。その一歩としての兄への打診だった。父が「希望が叶えば家を出て新しい生活を始めることになるよね。少しでも不安なく充実した人生を送るために、保険という後ろ盾が必要だと感じたなら手続きをしよう。」と兄に資料を渡した。兄は発達障害がある。口頭の指示は理解しづらく、注意力も散漫だ。周りの理解に恵まれてなんとか高校卒業には漕ぎ着ける気配だが、その後の自立となるとあまりにも不安要素は多い。兄は「保険が必要な状況のイメージわかない。すぐは決められない。」と言った。私も三年後、成人した自分を想像する。私は特定疾患があるため、先日の入院で医師から「高校卒業した後も、治療を考えると大病院に通院が可能な範囲での進学や就職が望ましいかなあ。」と説明された。今と変わらない守られた環境で、「自立」というイメージはつきにくい。自分に必要なものを自分で決めることは、今の兄と私には難問だ。

『ライフプランニング』をしてみるといい。将来どんな人生を送りたいかの構想を描くことで必要な準備がイメージできると思うよ。」と父が言った。それは今の自分を出発点として自分の資源を見出し、生き方を問い直し、将来を見通して人生を考えることらしい。進学、就職、結婚、出産など様々なライフイベントを想定し、目標の実現をお金の面から支える合理的な設計書を作成する。「その中で自己保有しきれないリスクをヘッジするのが保険の役割。リスクを認識して、どこまでのリスクなら自己保有できて、どの部分は保険でカバーするかを見極めることが大切なんだ。」と父は言う。

兄は保険加入を決めた。「ママ（祖母の渾名）、最後に僕らに夢を叶えて幸せに生きて欲しいって伝えたかったと思うんだ。不測の事態が起きても保険があれば、きつと夢を諦めないで頑張れる。想いの託し方は人それぞれだけれど、保険ってラストブレターとも言うんだって。自分がいなくなった後も大切な人に想いを

第63回中学生作文コンクール

届けて守ってくれるなんて、分身がいるみたいで心強いな。『もしもの時はお互い様』の気持ちで成立する保険って、愛だね。」と話した。見知らぬ人達が手を取り合い、誰かの夢や人生を支える。保険について知ることは、私達兄妹にとって自立という人生の目標への見通しをつけることで、あらためて家族や周りの人に感謝する唯一の機会だった。よし、私も病気を言い訳にせず、やりたいこと、やるべきことを見つけよう。

備えあれば憂いなし。この言葉は元々「普段から危ない所を『知る』と、そこから何かしようと思うから、備えるので何かあっても大丈夫」という意味だそう。備えるためには知る。具体的な「憂い」すなわち危機意識を持つことで、どう対処すべきかという備えが構築される。自然災害や未曾有のウィルスの脅威や戦争など、まさかと思っていたことが起こる時代だ。万が一の際に、自分や誰かを守る。その手段の一つが保険だと思う。

「お金は選択肢だよ。なりたい自分への可能性が確保できる。私は保険で想いをあなたたちに託す。お金が全てじゃないけど、お金の愛情を込めることはできるから。」母は言う。私は託された想いを胸に、自分の人生を歩む。祖母もきつと、見守ってくれている。